柿本人麻呂

中西進

本詩人選 2

筑摩書房

中西　進〈なかにし・すすむ〉
国文学者・成城大学教授。昭和四年東京生。東京大学卒。著書「万葉集の比較文学的研究」「万葉史の研究」ほか。

日本詩人選2　柿本人麻呂

昭和四十五年十一月二十五日第一刷発行
昭和四十九年　五　月　二十　日第六刷発行

著　者　中西　進

発行者　井上達三

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一—七六五一（代表）
振替東京四一二三郵便番号一〇一—九一

印刷　明和印刷　製本　鈴木製本

©1970中西進

（分類）1392（製品）13202（出版社）4604

目次

はじめに　五

Ⅰ　讃仰　九

雷丘　長皇子猟路池従駕歌　新田部皇子献歌　吉野讃歌

Ⅱ　喪失　三八

近江荒都　夕浪千鳥　八十宇治河　軽皇子安騎野従駕歌

Ⅲ　鎮魂　六〇

日並皇子殯宮挽歌　高市皇子殯宮挽歌　狭岑島の死者

Ⅳ　追憶　八九

泊瀬部皇女献歌　明日香皇女殯宮挽歌　吉備の津の采女

Ⅴ 別　離　二七
軽の妻の挽歌　石見の妻　み山もさやに
Ⅵ 孤　独　二四
玉裳の裾　浜木綿　袖布留山　妹が心
Ⅶ 旅　愁　一八二
敏馬　野島　加古の島　明石大門　大和島根　鴨山の岩根
人麻呂歌集の世界　二二五
おわりに　二五五
人麻呂和歌索引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

柿
本
人
麻
呂

はじめに

たとえば浮世絵師の写楽にしてもシェークスピアにしても、すぐれた芸術家というものは、往々にして、作品だけをわれわれに手渡しして、生身の姿を明かそうとはしないものだ。作品だけが芸術家の悲願であって、現実の生はすべてその中に収斂（しゅうれん）されてしまうのかもしれぬ。あるいは遠い古人の場合には、生身の彼が歴史の中で置きざりにされてしまうのに、作品だけは千古の輝きをもって生き長らえるということもあろう。いずれの場合も、要するにすぐれた芸術なのだ。

万葉集の歌人、柿本人麻呂の場合も、まさにそのようである。彼の歌は死後の長い歴史の中に何時変ることなく、不滅に生き長らえて来た。たとえば「古今集」の時代などは、その歌風からいえば、むしろ非人麻呂的なものが理想とされたはずである。ところがその序文には、

「古今集」の立ち帰るべき歌の時代の代表として、人麻呂は述べられている。その時には、じつは「万葉集」の実作から見ると何とも疑わしい人麻呂像がちゃんとでき上がっていて、「古今集」の歌人たちはそれを庶幾しているのである。

つまり歌の聖としての存在自身がすでにつくり上げられていて、人麻呂はその手許に引き寄せられ、勝手に造型されてしまう。すぐれた芸術家は、こうして、つねに作品に埋没してしまうものなのだ。

しかし、真実の人麻呂はかくも埋没してしまっているのに、彼の名声は、これまた驚くほどに高い。先にも「歌のひじり」といわれている「古今集」の序文のことをあげたが、中世の歌人たちは人麻呂を神とあがめ、その肖像をかかげては和歌に精進した。彼は日本各地に残された人丸神社の祭神となり、柿本寺の本尊となった。近代になっても、正岡子規は

人麿ののちの歌よみは誰かあらむ征夷大将軍みなもとの実朝

と歌っていて、日本の和歌をこの二人で代表させようとしている。

これは今日のわれわれの中にも深く広く信じられていることで、おそらく人麻呂の名を知らぬ日本人はいないであろう。その代表作はわれわれの生活の中にも愛され口ずさまれている。彼は和歌史上最大の詩人であり、第一級の歌よみである。旅の途上にあっては、その旅愁にみちた歌や叙景の歌を、人を恋う時は、その恋のしらべを、そして戦場の兵士だった人は、その

至純な抒情を唇にしたにちがいない。まさしく国民詩人の名は、人麻呂のために用意されたことばのようにさえ思われる。

それでは、人麻呂はなぜこのように広く長く日本人から愛されるのか。その価値はどういうところにあるのか。人麻呂の時代には、歌は文字どおり口で歌われるものであった。そのための愛唱するに足る声調も、彼の歌はそなえている。しかし快いリズムだけが、このように長い生命を生むはずはない。その詩の生命の秘密はどこにあるのか。これから見て行こうとするのは、この人麻呂の詩の秘密である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I　讃仰

古代の歴史や文学を考える人々によって、すでにあまねくいわれていることだけれども、壬申の乱とよばれる戦いは、やはり大きな出来事だった。六七二年、天智天皇崩御の後にでき上がった大友皇子の新政権を倒して、大海人皇子が天武天皇として即位するに到るこの戦乱は、いわゆる白鳳時代の開幕を画するものとされている。この白鳳時代と呼ばれる天武治世の意味は、従来天智の急進主義に対する天武の保守的修正であるとか、天武による保守勢力の打破ならびに大化の理想再興であるとか、いろいろと言われてきたが、けっきょくはわたし自身急進的な近江朝の政治を修正して、大化改新以来の政治路線をまっすぐに推進したものだったというのが正しい、と考えるようになった。

壬申の乱に先立つこと二十七年、大化改新は、二十一歳の中大兄皇子を中心として行なわれ

たが、その時、大海人皇子は十六歳であった。時の模様とその後の成り行きを大海人はつぶさに見て来たはずである。この兄の新政は、鎌足という補佐役を得て、武断に過ぎるところがあった。古人大兄を亡ぼし、石川麻呂を殺し、また有間皇子をほうむったことは、強力に推し進めようとしていた新政のために、止むを得なかったとしても、人々の心をおののかせるには十分な冷酷さであったにちがいない。あるいは、母斉明天皇が九州で冥路についたのは、厭戦による殺害だったともいわれている。天皇殺害にまで及ぶような厭戦気分を生んだ朝鮮出兵、そしてその挙句の果の白村江における日本軍全滅。さらには蘇我赤兄をして「失政」といわせた大土木工事や、近江遷都の強行。これらはすべて大化以降天智の死に到る二十七年間に行なわれたのだった。

壬申の乱はその二十八年目の事件である。この時の戦いで、人心の多くは大海人皇子についた。ということは、二十七年間における天智政権への批判がそのまま大海人がわに味方したということであって、ひとり大海人の人間的信頼や同情だけではあるまい。乱勝利後の大海人の新政府は、当然この天智批判の声をとり込んで政策を進めることになろう。それは十六歳の日からつぶさに見て来た経験の中に養われた大海人なりの理想を実現することでもあった。天智の新政治路線の挫折と、それに代る天武路線の開始とが、壬申の乱の意味するところである。

天智の改革路線は武断的であったが、さらにもう一つ、半島文化への接近も、これまた急激

すぎたきらいがあった。天智朝はそれなりに急速な文化の進展を見たし、近江の都は唐風文化に絢爛と輝いたけれども、天武にいわせれば、基本の国内体制や王権の整備が、いっそう必要なのである。大化改新において、蘇我氏の行政権力を一挙に斬って捨てることによって得た新政権は、遠く半島の百済の浮沈にかかわるよりも、もっと対内的に王権の基礎を固め、天皇をピラミッドの頂点とする政治機構を絶対的なものとすることの方が急務だった。強力に政治を進めて行く兄と鎌足との首座から遠く、発言力のない座に坐って四十二歳の今日までを過ごした大海人のひそかに心に抱いていたことは、そうした批判と不満とではなかったか。「大織冠伝」によると、ある遊宴の席で、大海人が突如起ち上がって長槍を床板に突きさすという事件が起こった。驚いた天智が大海人をとらえて殺そうとしたが、鎌足が諫めて事なきを得た、という。この大海人の行為は、天智朝廷における彼の不満を十二分に示しているし、じっと隠忍に堪えて来た様子を物語っているではないか。

今、大海人はこの隠忍から解き放たれる時が来た。天智の武断と急進とを修正して、自らの新政具現をはかるべく、天武は都をもとの飛鳥に還す。そこでまず実行したことは、天武四年（六七五）の部曲廃止、王臣らに与えていた山林原野を公に収めるという、私有の禁止であった。天武十一年（六八二）には、親王らの食封も公に収めている。また同年に諸豪族に氏上の届出を督促しているのは各氏族を傘下におさめる準備であるし、その二年後、天武十三年（六八四）

には、その上に立って、八色の姓を定めている。官僚体制の整備である。世にいわゆる浄御原令と呼ばれるものの制定は天武十年（六八一）に作業が開始され、同年、川島皇子を中心として始められた「帝紀」ならびに「上古の諸事」を記述する作業は、後に「日本書紀」として完成した修史事業であった。

これら天武の治政において、遠く大化改新に端を発する新政は、着々と現実化していったということができよう。律令制を根幹とする、強固なる天皇支配の政治であった。天智は、相対立しあう弟によって、皮肉にもおのが理想を実現することになったのである。いや、歴史というものは、つねにこうした急激な前進と、それを少しずつ補正する後退とを繰り返しながら、流れていくものなのであろう。

わが柿本人麻呂が登場して来るのは、この天武の皇后、持統の治世においてである。この時代も、後に詳しく述べるように、天武の遺業を持統が一途に完成しようとした時代である。人麻呂という歌人は、この時代の志向を誰よりも強く体現した歌人であり、かつ持統朝廷に密接した宮廷歌人であった。したがって、先ほどから述べて来たような大化以来の、強固なる天皇支配の宮廷精神は、人麻呂の詩的倫理でさえあった。人麻呂における詩の主題が、第一に王権の讃仰にあったことは、容易に理解されることであろう。

天皇、雷の岳に御遊しし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首

大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬せるかも

（巻三・二三五）

ここにいう「大君」はおそらく持統天皇をさすのであろう。ある日持統女帝は雷の丘の上に登る。その供奉の中にあった人麻呂は、「天皇は神でいらっしゃるから、今こうして雷の丘の上にいおりしておいでになることだ」と歌ったのである。

雷の丘は明日香の雷部落にある小丘で、最近の研究によると、ここは藤原京の南東の隅になる。持統が藤原の宮から出遊したとすれば、ほぼ二キロの距離である。この小丘は一見何の変りばえもない山に見えるけれども、当時「神岳」と称せられ、いわゆる三諸の神奈備山であった。「ミモロ」とは神の降臨するという意味で、「カムナビ」もまた、神の辺りの意で、古代人が神のいます山として尊崇したのが、この雷の丘であった。この丘の麓を飛鳥川がめぐって流れる。この清流を「帯にする」ことも、諸処の神奈備の必須の条件である。「日本書紀」雄略七年七月の条には、天皇がこの岳の神の形を見ようとして、その神を捉えさせたものの、その威をおそれて岳に放ったとあり、その由来によって、この丘を雷と呼ぶという。つまりこの山

にます神は雷の神だったことになる。「天雲の」という修飾は、この雷神のゆえに冠せられたものである。

さて、このように崇高な神山の上に、今天皇は「廬をする」。そうした所業は「大君は神にし座せば」こそ可能だと人麻呂は歌う。天皇が神であるという、この思想こそ、先程から述べて来た白鳳の強靭な体質を培った宮廷精神であった。「万葉集」には「壬申の年の乱平定以後の歌二首」と題された、

大君は神にし座せば赤駒の腹ばふ田井を都となしつ　（巻九・四六〇）
大君は神にし座せば水鳥のすだく水沼を都となしつ　（巻九・四六一）

という歌が載せられている。後の歌は作者未詳のものだが、先の歌は壬申の乱に活躍した大伴御行のもので、「大君は神にし座せば」ということばが、壬申の乱以後の歌と題されて登場することは、白鳳の時代精神がこのことばに集約的に示されることを物語っていよう。しかもこれは右の歌々にとどまらず、人麻呂と同じ宮廷歌人の立場にあったと思われる置始東人が、弓削皇子の薨去に際して作った長歌の反歌に、

大君は神にし座せば天雲の五百重が下に隠りたまひぬ　（巻二・二〇五）

と歌い、当の人麻呂自身にも、ほかに、

大君は神にし座せば雲隠る雷山に宮敷きいます　（巻三・三五五の或本歌）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.